

弘前から出た小説家  
石坂洋次郎 いしざかようじろう

弘前市常盤坂ときわざかのリンゴ公園に、西方にくつきりと浮かんだ岩木山に面して、りっぱな石碑が立っている。

碑文は人物はとぼしいが空は青く雪は白く、リンゴは赤く、女たちは美しい國、それが津軽だ。わたしの日はそこで過ごされ、わたしの夢はそこで育まれた。昭和四十九年九月、石坂洋次郎Vとなっている。

太平洋戦争（一九四一年～一九四五年）はおわったが、くらい出来ごとがつづくとき、『青い山脈』や『丘は花ざかり』『石中先生行状記』などの明るい作品で、人びとに生きる力と、希望をあたえた石坂洋次郎は、弘前から出た小説家で、こよなく郷土（津軽）を愛し、郷土をえがいた作家だった。

洋次郎は一九〇〇年（明治三十三）、弘前市代官町だいかんちようで父忠次郎ちゆうじろう、母トメの次男として生まれた。

洋次郎は、弘前市立朝陽ちようよう小学校に入学したが、五、六年生のころから、友人と手製の雑誌をつくり、少年小説や冒険小説を書くなどはや  
くも、文学へのとくべつな興味と関心を示している。

洋次郎は幼いころから病弱で、県立弘前中学校（いまの県立弘前高等学校）に入学したが、びっくりするほどのやせっぱで、体重はわずかに五貫（一八・七五kg）しかなかった。

せっかく、中学校に入学したものの、洋次郎は学業よりも詩や短歌、小説をつくることに熱中して新聞に投稿をつづけた。

弘前中学校を卒業した洋次郎は、父母のはんたいをおしきって、慶応義塾大学文学科予科に入学し、一九二五年（大正十四）に同大学文学部を卒業した。

めずらしいことに現在とちがって、そのころは学生で結婚するものが多く、洋次郎も弘前の今井うら子と、学生結婚をしている。

大学を卒業した洋次郎は郷里、弘前にもどって、県立弘前高等女学校（いまの県立弘前中央高等学校）に、教師としてつとめた。

しかし、わずか一年で秋田県立横手高等女学校（いまの秋田県立横手城南高等学校）に転任した。一九二六年（大正十五）、洋次郎が二十六歳のときである。

そのあと洋次郎は、一九三九年（昭和十四）までの十三年間、横手町に居をかまえて、つぎつぎに作品を手がけた。洋次郎が中央の文壇にみとめられ、作家としての地位を確立したのは、『若い人』や『麦死なず』などの作品だが、みな横手町にいて手がけたものである。

とくに、『若い人』の作品で注目されるのは、江波恵子という、一風かわった少女を登場させた点である。

「……私には父がない。(中略) 家事(家庭科)の徳永先生に、「私生児って何ですか?」とたずねたら、「神様の祝福を、うけずに生まれた子供のことです。」と、先生は答えられた——というような作文を、江波恵子は平気で書く生徒である」

この作品は洋次郎が、自分の教員生活で体験したことをもとに創作したといわれる。

だが、この『若い人』の内容の一部が、皇室中心の軍国時代の当時の世相からは、相いれないものとして見られ、不敬罪(天皇や皇后など、皇室にたいして礼をかけた、言動への罪)や、軍人誣告罪(事実をまげていうことへの罪)で、検事局に告訴された。

とくに不敬罪になったのは、修学旅行で宮城前にあつまった女学生と、女教師とのあいだの会話だった。

すなわち「……先生、天皇陛下は黄金の御箸で御食事をなさるって、ほんとうですか?」と、たずねる部分だといわれる。

しかし、じつさいには事件は、不起訴(検事が起訴しない)になったが、このことのために洋次郎は、十四年間つとめた教職をやめて上京し、本格的な文筆生活に入った。

子供のころから、文学につよい関心と、あこがれをもっていた洋次郎は、大学時代——一九三三年(大正十二)郷土の先輩作家である、葛西善蔵(一八八七年〜一九二八年)を鎌倉にたずねている。

善蔵は弘前の出身で、『子をつれて』や『不能者』、『哀しき父』など、自分の生活に取材した作品（私小説）が多く、この独自の私小説が文壇にもみとめられていたが、作品は思うように売れず、そのため生活はくるしかった。

しかも、病気がちでありながら、善蔵は自制心が弱く、酒におぼれる人だった。

洋次郎がたずねたときも善蔵は、敷きっぱなしの、床の上にあぐらをかいて、昼日なから酒をのんで、酔っぱらっているところだった。からになった酒の瓶が、まわりにごろごろころがっている。

しかも、善蔵は文学のためには、家族をもぎせいにする（たとえば、生活がくるしくなると家族を、妻の実家である南津軽郡浪岡町にかえすなど）生きかただった。

「あつ。これが先輩？」洋次郎もいままで暗く、じめじめした内容の、善蔵の作品をよんではいたが、じつさいに本人をたずねて、それが作品に裏打ちされたように、あまりにも陰湿で非健康的な姿を見て、ショックが大きく洋次郎は、はじめ声も出なかった。

会うまでは、おなじ郷土の先輩作家を、心のなかでは師とも考えて来たのに、洋次郎は自虐的な善蔵を、目のまえにして失望し、つよい反発を感じたにちがいない。

「よおーし。ぼくは、これから読者にゆめと、希望をあたえるような、明るい小説をかく作家になるんだ。」と胸のなかでつぶやいた。

のちに、洋次郎が手がけた作品、『海を見に行く』や『壁画』『闘犬図』『リヤカーを曳いて』にしても、新鮮で健康で明るく、生命力にあふれたものばかりである。

そのひとつに、『草を刈る娘』がある。

この作品は、一九四七年（昭和二十二）、太平洋戦争がおわったばかりで、生活物資は不足し、人びとの心はまだ定まらず、空襲で焼けた国土の復興も完全ではなかったときに、洋次郎が書いたものである。

内容は、秋の岩木山のすそ野を舞台に、農耕馬のうこうば（そのころ農家では、農作業に使う馬を飼っていた）の草を刈る、若い男女の心の交流をとりあげたものである。

△若い二人は、怒ったようにムッチリした顔をして、細い沢目さわめを隔ててならびながら、草を刈って上のほうに動き出した。

年寄りの女たちは、ちよつとのあいだ、そのうしろ姿を見送っていたが、すぐわすれたように、自分たちの世間話をはじめた。（中略）

モヨ子は、大きく鎌を使いながら、少しづつ緑の斜面をはい上っていた。傍目わきめはしないのだが、それでも視野しやのどこかには、沢の向こう側で動いている、時造のカーキ色の姿が、絶えずもやっていた。

あたりはもう、二人だけの世界であった。

空は青く晴れわたり、沢水はチヨロチヨロと眩つぶやき、ところどころに、すすきの穂が銀色にけむって、わずかの風にゆれなびいていた。それは昨日と、かわらない眺めであったが、モヨ子には今日のひるすぎから、世界が全く違ったもののように感じられるのだった。

なんというか、いままで空からっぽであったものが、急にビツシリと、実が入ってきたような気持ちであった。

沢目に灌木かんぼくが茂っておって、向こうがわが見えなくなるところがあった。それが少し長くつづいている場所だと、モヨ子は天地の中に、一人ぼっちにされたような、寂しさを感じて、鎌をとめて、じいっと沢の向こうがわを見まもった。

そして灌木の茂りの端のほうに、時造ときぞうのカーキ色のシャツが見え出すと、ホツとして何気ない風で、自分もしごとをつづけるのであった。男と女が、ならんで刈るのだから、モヨ子のほうはとかく遅れがちだった。

すると男のほうでは、加減して待つようにしてやるので、結局、二人はそう離れずに、山のふところ近く刈りすすんで行った。

(中略)

ふと時造が歌を唄い出した。

重じゅう五ご七しちが

十五になるから山男

肩にまさかり腰になた

いたや花の木伐りそめて

……

腹の底から、しぼりあげるたくましい肉声で唄われる山唄は、いくつも木魂こだまをよんで、高原のなかに、ビリビリとひびきわたった。それは聞くものの胸の奥底に、ねむっている何もかをよび起こし、モヨ子は身体からだじゅうの血が、わき立つようにクラクラとした。そして、相手の歌がやむと、自分も憑つかれたもののように、精いっぱいの声で唄いかえした。

〽重五七が

沢を上りに笛吹けば

峰の小松はみななびく

……  
∨

この作品はまだつづくが、いかにものびのびとして、若きにあふれ、とくにモヨ子のはつらつとした、娘盛りのようすが、目の前に浮かんでくるようである。

洋次郎は、映画を見るのが好きだった。

ひまがあれば邦画、洋画のくべつなく見てまわった。そして彼の作品も、映画になったものが多い。

例えば『青い山脈』(出演は原節子、池部良その他)、『山と川のある町』(雪村いづみ、志村喬その他)、『何処へ』(加山雄三、渥美清その他)、『若い人』(池部良、島崎雪子その他)などがあるが、出演者もそうそうたるメンバーだった。

とくに、『陽のあたる坂道』が映画になるとき、洋次郎は作者の立場から、「ていねいに作ってほしい。」と希望をのべた。この作品の映画化に、つよい期待をよせていたからである。

洋次郎の希望にこたえて、脚本が出来てみると映写時間にして、実に六時間ものフィルムが必要だという計算になった。

「うーん……。」「いくらなんでも、これではあまりにも時間が、かかりすぎる。」ということになり、改めて映画会社と洋次郎が話しあった。たけつか、どうにか三時間三十分ほどにおさめることが出来た。

さて、映画『陽のあたる坂道』が上映されると全国的な反響をよび、どこの映画館も大当たりで、一九五七年(昭和三十二)度のベスト・ワンになった。このときに出演したのが、石原裕次郎や北原三枝などである。



洋次郎は、幼いときは体が弱かったが、家の近所の友だちとはよく遊んだ。

そして、どんな小さなことでも、すぐ遊びにかえてしまう子供たちを、洋次郎は後に自分の思い出もまじえて、次のように書いている。

ハさいかち（豆科の落葉高木）の急カーブを、下りたところに橋がかかっていた。（中略）

冬が去って春のはじめ、いちばん先きに雪が消えて、白くかわいた土の面をあらわすのは、この橋の上であった。

これは坂の上から流れてくる、雪どけみずの作用であろうが、子供らは川からボヤボヤ立ち上がる、湯気のためだと考えていた。

ほんとうにその時分になると、川は一日じゅうさかんな、湯気をたててゴボゴボと流れた。（中略）

雪どけのぬかるみがつづくあいだ、子供らは下駄をはいて外に出るが、橋のうえでは、ふところから去年の土がついた、あしだか（藁でつ

くったぞうり）を取りだして、下駄をはきかえた。

彼らのふところは、魔法袋まほうぶくろのように、いろんなものを橋のうえの、日あたりに出現させた。焼きいも、かんしゃく玉、石弓、古雑誌、鳥

の羽根、リンゴ、生きた子ネコ、人形の首……。

ふところの内がわは、ひと冬つめこんだ物の、かすや汁で、ガバガバとほし固められ、鼻をつっこむと薬のように、するどくプーンとお

った。

彼らはこの貯蔵庫のにおいを、菓子にもくだものにも、しみこませて食った。そうして猿のように、すばしっこく橋のらんかんをわたって遊んだ。V

とのべているが、現代の子供たちとはあまりにもちがう——どんな粗末なものでも、すぐ利用して、自分たちの遊びに変えるところに、当時の子供たちの創造性とともに、たくましさ、明るさを感じるが、洋次郎もそのことに、心を打たれたにちがいない。

『青山脈』や『丘は花ざかり』、『石中先生行状記』などのほかに、『浴みする女』、『林檎の花咲くころ』、『乳母車』、『暁の合唱』など、かずかずの、話題作を手がけた洋次郎は、一九六六年（昭和四十一）に、第十四回菊池寛賞を受賞し、一九七三年（昭和四十八）には、弘前市民会館創立十周年を記念した、講演会と著作展ちよさくてんに出席している。

また、一九七四年（昭和四十九）には、弘前市常盤坂リンゴ公園に、石坂洋次郎文学碑が建立された。

よむ人に夢と希望をあたえ、ちよつぱりエツチな面も加えた、明るく牧歌ぼっかてき的な作品を、かず多く手がけた洋次郎も、晩年は静岡県いとうの伊東市に移りすんで、のんびりとくらしした。

追手門広場に、新しく出来た、弘前市立郷土文学館の二階は、石坂洋次郎記念室になっている。

ここには洋次郎の、さまざまな著書やアルバム、生いたちの記録や、原稿などが展示されているが、作品をかくときに使用した、万年筆をはじめボールペン、メガネなど貴重なものが、かず多く陳列している。

弘前のほかに、石坂洋次郎の文学記念館は、秋田県横手市にもある。

洋次郎は弘前に生まれたが、文学への出発は、横手市（当時の横手町）に住んだときだった、といっても過言ではない。

すなわち、一九二六年（大正十五）に、横手高等女学校の、教員として赴任（ふにん）してから、手がけた『麦死なず』や『若い人』によって、作家としてのゆるぎない、地位を確立したからである。

横手にある文学記念館は、洋次郎が住んだ屋敷町（やしき）の、おもかげを伝えるために、昭和時代のはじめごろの町屋と、土蔵の様子をもとに造ったものである。

この文学記念館は、一九八八年（昭和六十三）に開館したが、建物のなかはガラスで仕切られ、十三年のあいだ居住した横手時代と、晩年までをすごした、伊東時代にわけられている。

洋次郎が書いた原稿は、散り散り（ちぢ）になって、なくなつたものが多いといわれる。だが、ここにはまだ発表されなかった、『櫛（そり）すべり』や『著

者だより』などの原稿をはじめ、洋次郎が主宰した同人誌、『東方』の同人に出した、△小説の方法論▽をかけた手紙なども展示されている。

一九四六年（昭和二十一）に発行した、東北文学（河北新報社発行）創刊号に、『墓地のあたりで』という題でめずらしく洋次郎は家庭内のことを書いた作品をのせているが、その中の一部をしようかいする。

△……ある晩、私（洋次郎）は座敷ざしきに寝そべって本をよんでいた。妻（うら子夫人）と三女は、オリザニンの注射をしてもらうために、知りあいの木村医院に出かけていた。

そのとき玄関に、人がたずねる声だし、女中が出てそれに応待していた。が、女中はあわてて、座敷にかけこんできた。

「旦那さまだんな、たいへんです。奥さまが、捨て子すてこを拾ひろったんですって……捨て子をですよ。」

「捨て子？」私は、おうむがえしにつぶやいて、むっくり起き上がった。（以下略）これは妻と三女が、医者に行くところ、交番の前で巡査によびとめられ、「実は交番の近所に捨て子があったが、男ばかりで迷っている。ごめいわくでも明日の朝まで、あずかってほしい。」といわれ、妻は捨て子を抱いてそのまま木村医院まで行った。いま玄関をたずねて来たのは、そのときの巡査がミルクと砂糖をもって来た所だった。▽

なんとも、ほほえましい奥さんと、あわてた女中や洋次郎の様子が、目に浮かんでくるではないか。

晩年、伊東市に移りすんだ洋次郎の家は、山合いのしずかな中に建っていた。すでに、うら子夫人も亡く洋次郎は、お手つだいの人と、三匹の雑種犬とのさびしい生活だったが、毎週東京から長女がたずねてくるのを、たのしみにまっていた。

伊東に行ってから、津軽のことで思い出すのは、子供のころから見て育った岩木山や、門づけや唄会などで聞いた津軽民謡だという。洋次郎は年老いても、『じよんから節』も、『山唄』もおぼえていた。

洋次郎は、一九八六年（昭和六十一）十月八日に逝去した。八十六歳だった。東京の多摩霊園に墓があるが、弘前市新寺町貞昌寺にも分骨されている。

#### 参考文献

石坂洋次郎著『石坂洋次郎集』一九五六年（昭和三十）筑摩書房  
河北新報社『東北文学』創刊号一九四六年（昭和二十）河北新報社

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、三二三・三二五頁